

【漁況】

[マアジ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマアジの漁獲量は、昭和40年の53万トンにピークに減少傾向となり、昭和55年には5万4千トンとなりました。

その後増加傾向に転じ、平成8年には33万トンに増加し、平成10年までは30万トン台で推移しましたが、再び減少傾向に転じ、平成30年は11万7千トンとなりました。

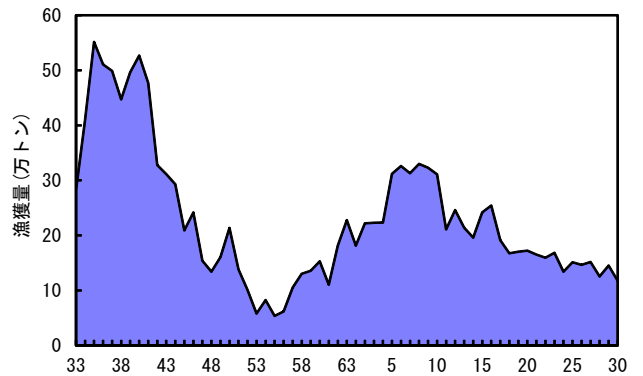


図 全国のマアジ漁獲量の推移

2. 県内の令和3（2021）年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、1月に甌東でマアジ仔（1歳魚：2020年生まれ）主体の漁場が形成されました。2月に串木野沖、甌東でマアジ小（2歳魚：2019年生まれ）主体の漁場が形成されました。3月に縄瀬でマアジ豆（1歳魚：2020年生まれ）主体の漁場が形成されました。

薩南海域では、1月に志布志沖でマアジ中小（2歳魚：2019年生まれ）主体に漁場が形成されました。2、3月に志布志沖でマアジ豆、小（1～2歳魚：2019～2020年生まれ）主体に漁場が形成されました。

4港計のまき網では、期全体で1,603トンの水揚げで、前年の192%及び平年の169%でした。

3. 県内の令和3（2021）年4～6月期の見とおし

漁獲主体：マアジ豆、小（1～2歳魚：2019～2020年生まれ）

来遊量：前年・平年を上回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過と漁獲パターンから予測しました。

前期に引き続き、今期もマアジ豆、小が漁獲の主体となることが予測され、前年・平年を上回ると考えられます。

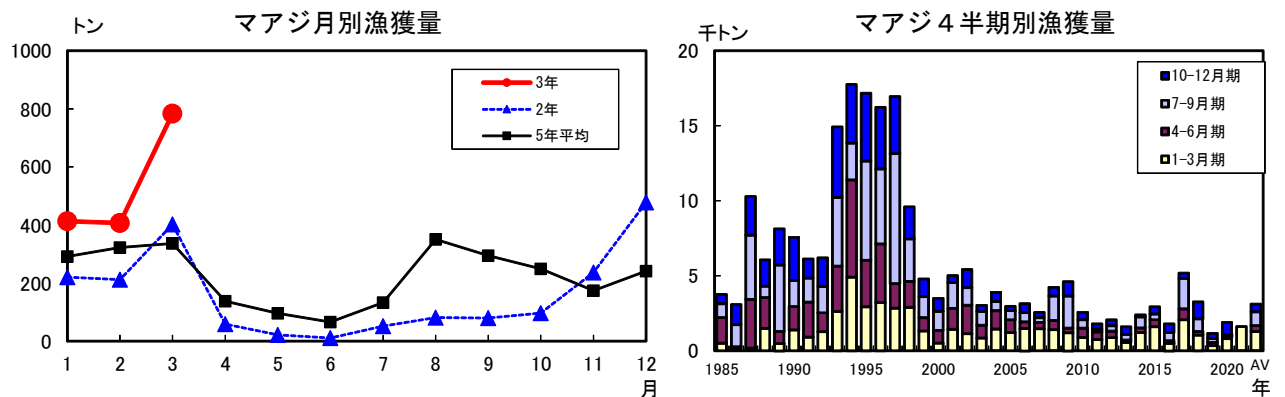


図 マアジまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値(AV)，令和3（2021）年3月24日までの水揚げ量を使用

[サバ類]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のサバ類の漁獲量は、昭和53年の160万トン进行ピークに年々減少し、平成3年には26万トンとなりました。

平成5年から増加に転じ平成9年には85万トンとなりましたが、平成14年には28万トンまで減少しました。

平成18年に65万トンまで増加したあと減少傾向となりましたが、平成30年は54万1千トンとなりました。

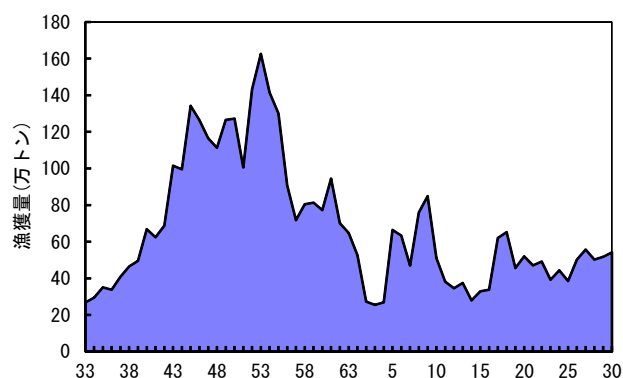


図 全国のサバ類漁獲量の推移 年

2. 県内の令和3（2021）年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、1月に甌東でサバ類小、豆（1～3歳魚：2018～2020年生まれ）主体の漁場が形成されました。2月に串木野沖、甌東でサバ類豆（1～2歳魚：2019～2020年生まれ）主体の漁場が形成されました。3月に縄瀬でサバ類小、中（2～5歳魚：2016～2019年生まれ）主体の漁場が形成されました。

薩南海域では、1月に馬毛島でゴマサバ大、中（3～5歳魚：2016～2018年生まれ）主体、野間池沖でマサバ豆（1～2歳魚：2019～2020年生まれ）主体の漁場が形成されました。2月に志布志沖でマサバ豆、ゴマサバ豆（1～2歳魚：2019～2020年生まれ）主体の漁場が形成されました。3月に志布志沖、内之浦沖でマサバ豆、マサバ大、ゴマサバ大（1～5歳魚：2016～2020年生まれ）主体の漁場が形成されました。

4港計のまき網では、期全体で4,828トンの水揚げで、前年の47%及び平年の67%でした。

3. 県内の令和3（2021）年4～6月期の見とおし

漁獲主体：ゴマサバ豆～大（1～5歳魚：2016～2020年生まれ）

マサバ豆～大（1～5歳魚：2016～2020年生まれ）

来遊量：前年・平年を下回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や漁獲パターンから予測しました。

前期に引き続きマサバ豆が漁獲の主体となることが予測され、昨年3、4月にまとまった来遊のあったマサバ産卵群の漁獲が今期は低調に推移していることから、前年・平年を下回ると考えられます。

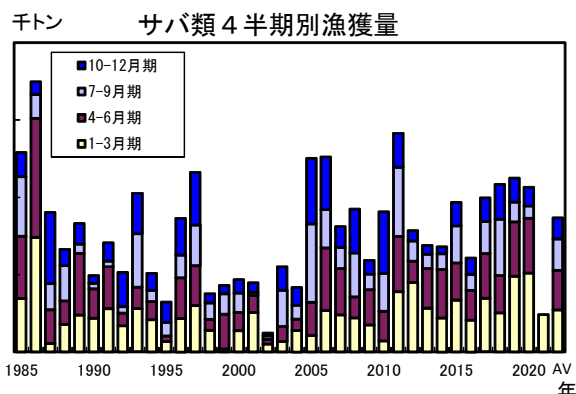
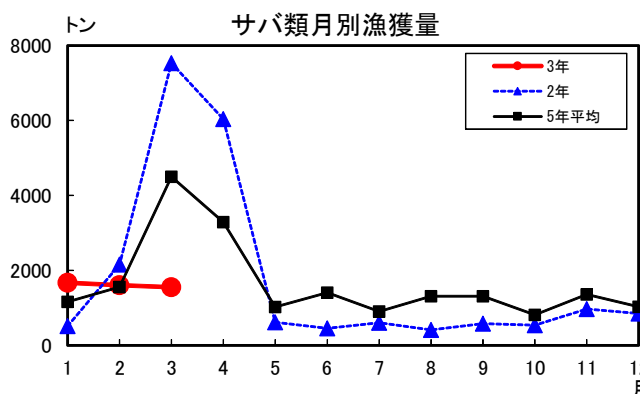


図 サバ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、令和3（2021）年3月24日までの水揚量を使用

[マイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマイワシの漁獲量は、昭和30年代から40年代にかけての不漁期の後、昭和48年頃から増加の傾向が見られ、昭和63年には449万トンまで増加しました。

平成元年以降、全国的に漁獲量は減少を続け、平成14～22年までは、10万トンを下回る低い水準で推移していましたが、平成23年以降は10万トン以上に増加しました。

さらに、平成25年以降は20万トンを超える漁獲が続き、平成30年には52万トンとなりました。

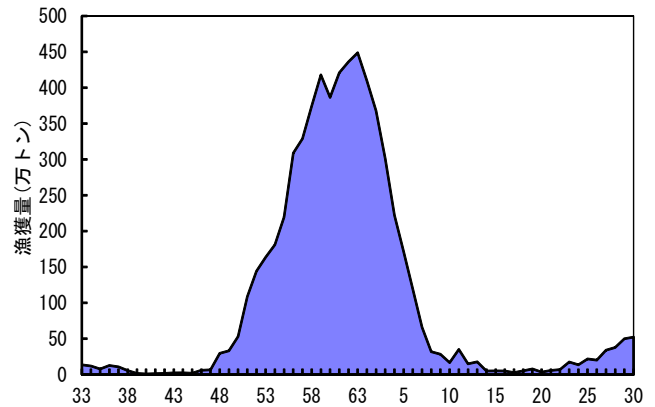


図 全国のマイワシ漁獲量の推移 年

2. 県内の令和3（2021）年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、1～2月に甑島周辺で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、3月に野間池沖、内之浦沖で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、22トンの水揚げで前年の469%及び平年の16%でした。

北薩海域の棒受網では、7トンの水揚げで平年の210%でした。（前年はまとまった水揚げがなかったため比較できず）

3. 県内の令和3（2021）年4～6月期の見とおし

漁獲主体：小羽（0歳魚：2021年生まれ）

来遊量：前年・平年を上回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期の漁獲の主体となる小羽（0歳魚：2021年生まれ）は、前期1月の卵稚仔調査で卵が前年・平年を上回って出現したことから、低調だった前年・平年を上回ると考えられます。

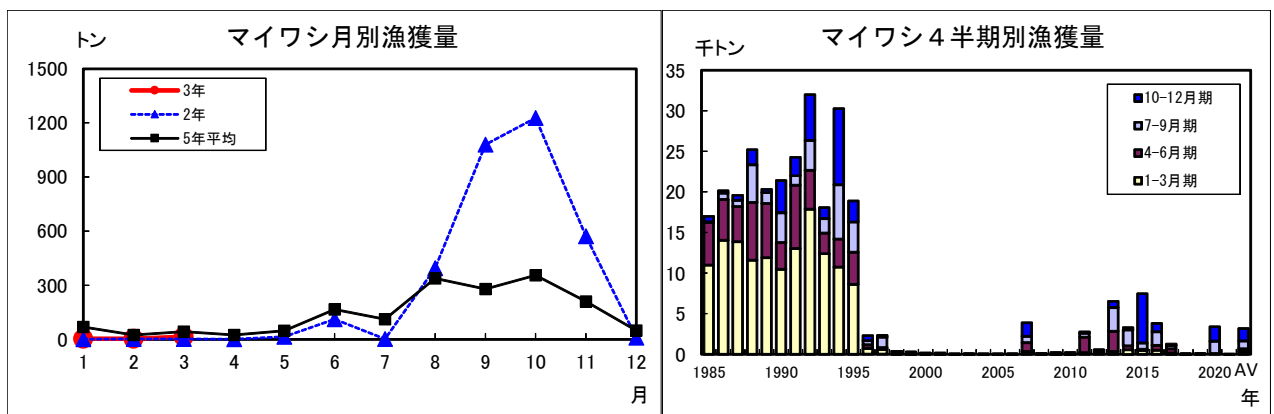


図 マイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、令和3（2021）年3月23日までの水揚量を使用

[ウルメイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のウルメイワシの漁獲量は、昭和30年代以降、増減を繰り返しながらも増加傾向を示し、平成6年に6万8千トンとピークを迎えた後、減少傾向に転じ平成12年には2万4千トンまで減少しました。

平成15年以降は再度増加傾向に転じ、平成28年は9万8千トンで昭和33年以降では最高の漁獲量となりましたが、平成30年は5万4千トンと大きく減少しました。

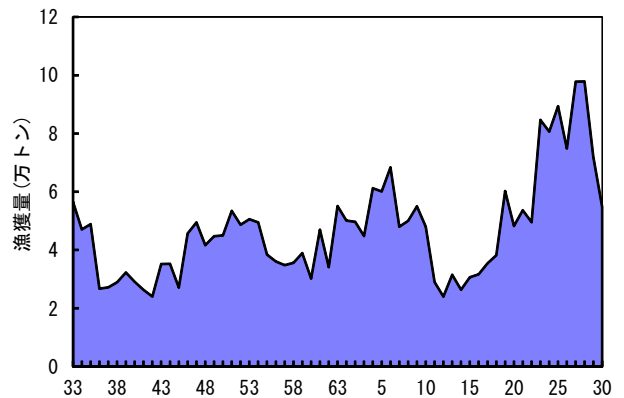


図 全国のウルメイワシ漁獲量の推移

2. 県内の令和3（2021）年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、期を通じて串木野沖、3月に縄瀬で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、期を通じて志布志沖で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、期を通じて中～大羽（1歳魚：2020年生まれ）主体に401トンの水揚げで、前年の289%及び平年の52%でした。

北薩海域の棒受網では、2トンの水揚げで、前年の2,370%及び平年の3%でした。

3. 県内の令和3（2021）年4～6月期の見とおし

漁獲主体：4～5月は中～大羽主体（1歳魚：2020年生まれ）で、5月以降は小羽（0歳魚：2021年生まれ）

来遊量：前年並で平年を下回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

前期3月の漁獲量と今期の漁獲量に正の相関があり、これを基に予測すると、来期は前年並で平年を下回ると考えられます。

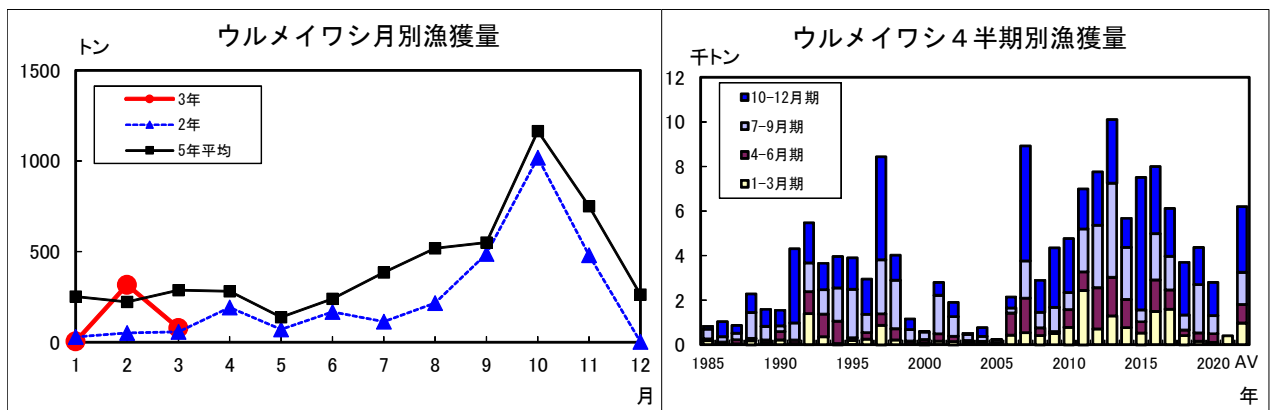


図 ウルメイワシまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値(AV)，令和3（2021）年3月23日までの水揚量を使用

[カタクチイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のカタクチイワシの漁獲量は、昭和48年まで30万トン台で変動していましたが、昭和49年以降減少傾向となり昭和54年には13万トンとなりました。

その後は大きく増減を繰り返しながら増加傾向にあり、平成15年は過去最高の53万5千トンとなりましたが、その後減少傾向に転じ、平成30年は11万1千トンとなりました。

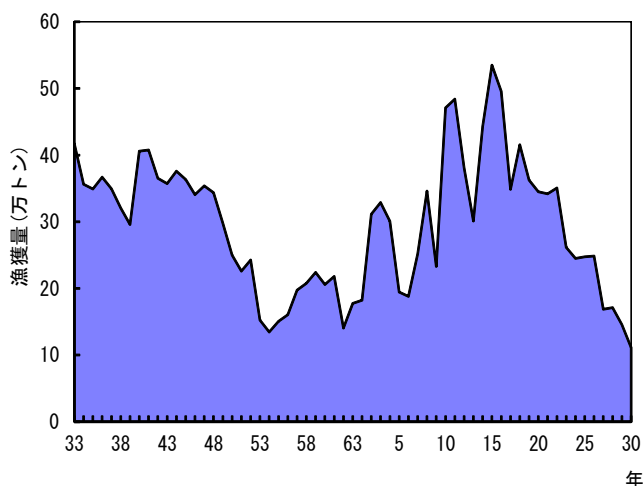


図 全国のカタクチイワシ漁獲量の推移

2. 県内の令和3（2021）年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、期を通じて八代海で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、3月に内之浦沖で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、大羽（2歳魚：2019年生まれ）主体に112トンの水揚げで、前年の2,252%，平年の18%でした。

北薩海域の棒受網では、58トンの水揚げで、前年の133%及び平年の42%でした。

3. 県内の令和3（2021）年4～6月期の見とおし

漁獲主体：小～中羽（0～1歳魚：2020～2021年生まれ）

来遊量：前年並で、平年を下回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期に漁獲の主体となると考えられる小～中羽（0～1歳魚：2020～2021年生まれ）は前年の秋～冬期発生群と考えられ、昨年のシラス秋漁は前年並で平年を下回って推移したことから、今期は前年並で、平年を下回ると考えられます。

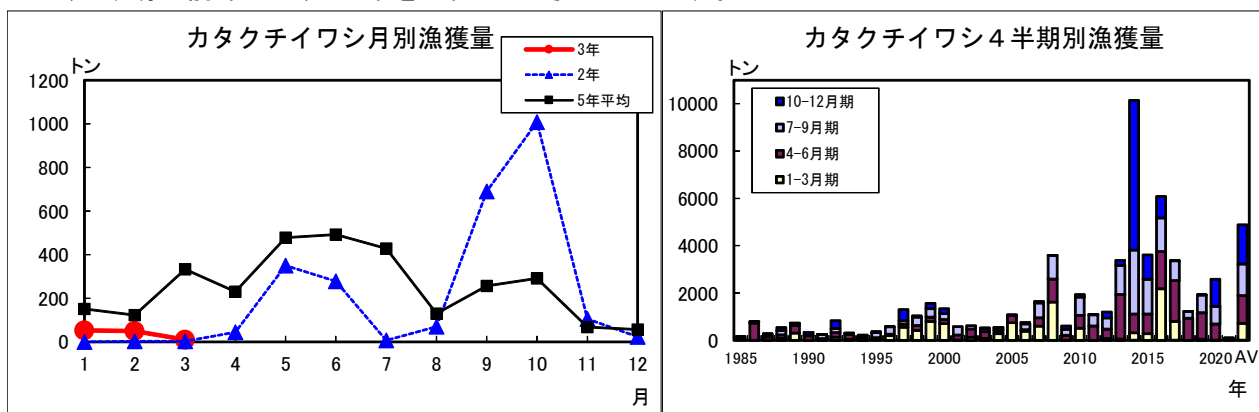


図 カタクチイワシまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値(AV)，令和3（2021）年3月23日までの水揚量を使用

[シラス]

1. 経年経過

バッチ網漁業の漁獲量は、西薩海域では、平成 11 年の 5,450 トンをピークに減少傾向を示し、平成 14, 15 年と 1,000 トンを下回り低調に推移しました。その後、平成 16 年は 3,507 トンと比較的好調に推移しましたが、平成 17 年以降減少傾向を示し、令和 2 (2020) 年は 1,120 トンとなりました。

志布志湾海域では、平成 19 年まで増加傾向を示しましたが、その後、1,000 トン前後で増減を繰り返しながら推移し、令和 2 (2020) 年は 1,228 トンとなりました。

2. 令和 3 (2021) 年 1～2 月の漁況の経過

西薩海域では、カタクチシラス主体に 40 トンの水揚げで、前年の 3,995 %、平年の 47 %でした。

志布志湾海域では、カタクチシラス主体に 41 トンの水揚げで、前年の 63 %、平年の 32 %でした。

3. 令和 2 (2021) 年 4～6 月期の見通し

漁獲の主体は、カタクチシラスでしょう。

来遊量は西薩海域は、前年を上回り、平年並と考えられます。

志布志湾海域は、前年を下回り、平年並と考えられます。

(根拠)

西薩海域では、海況の状況や直近の漁模様から、前年を上回り、平年並と考えられます。

志布志湾海域では、直近の漁模様から、前年を下回り、平年並と考えられます。

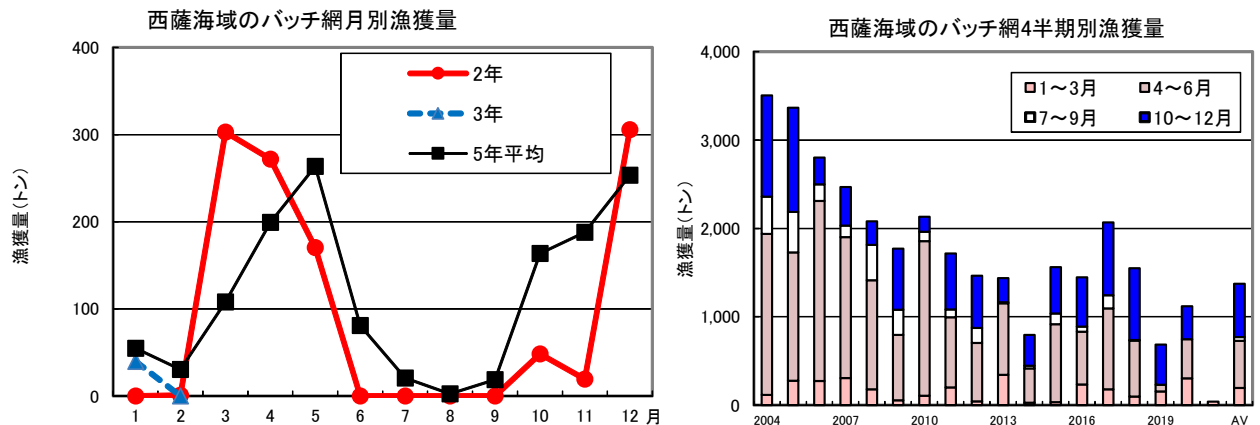


図 西薩海域バッチ網漁業の漁獲量変化(4漁協計)

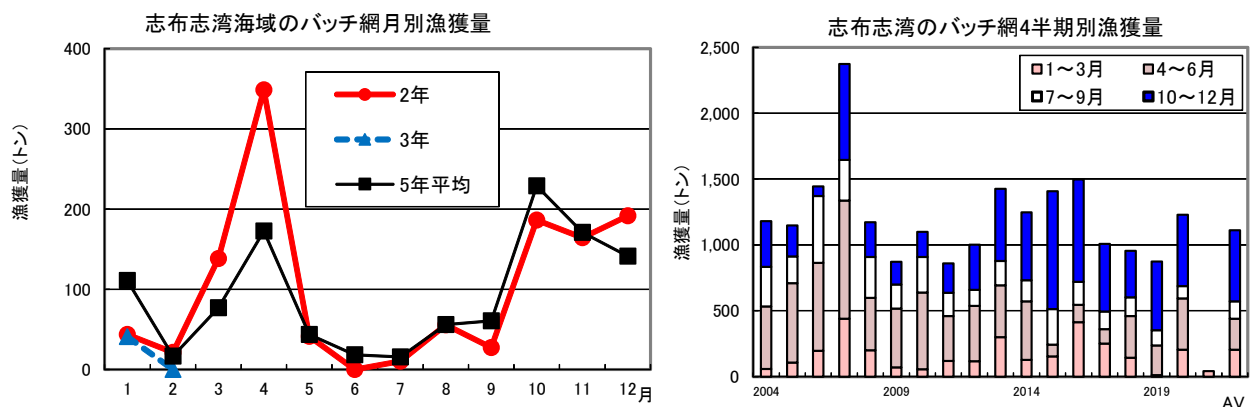


図 志布志湾海域バッチ網漁業の漁獲量変化(2漁協計)

※平年値は過去 5 年の平均値 (AV)，令和 3 (2021) 年 2 月 28 日までの水揚量を使用

[イワシ類参考資料]

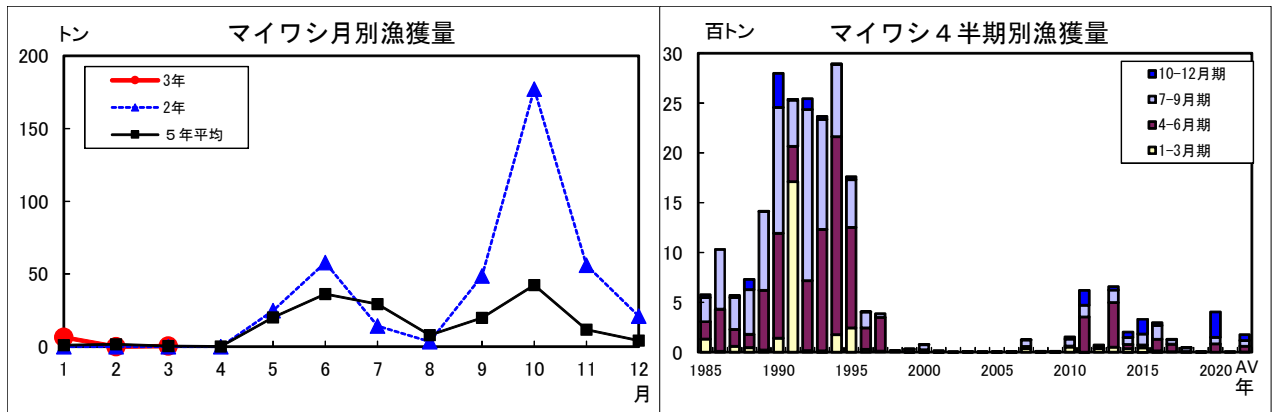


図 マイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

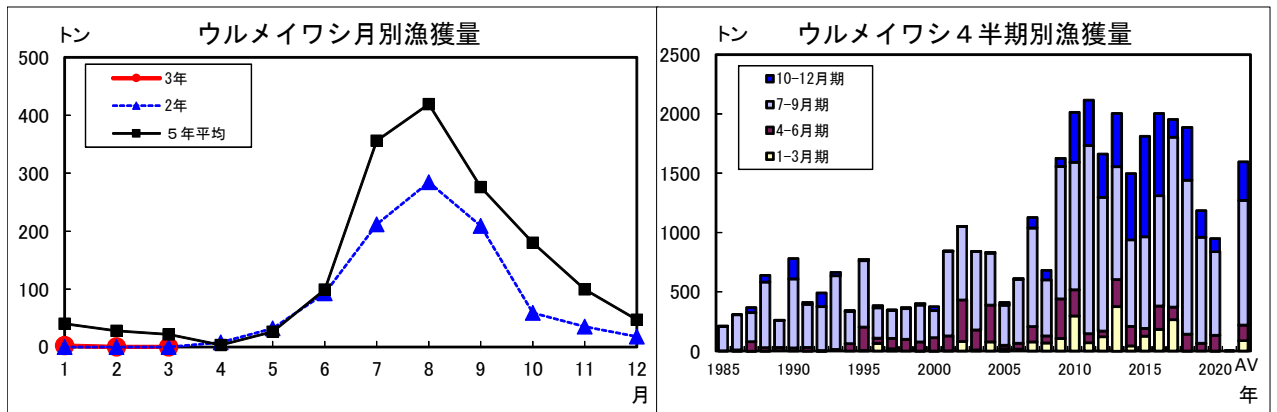


図 ウルメイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

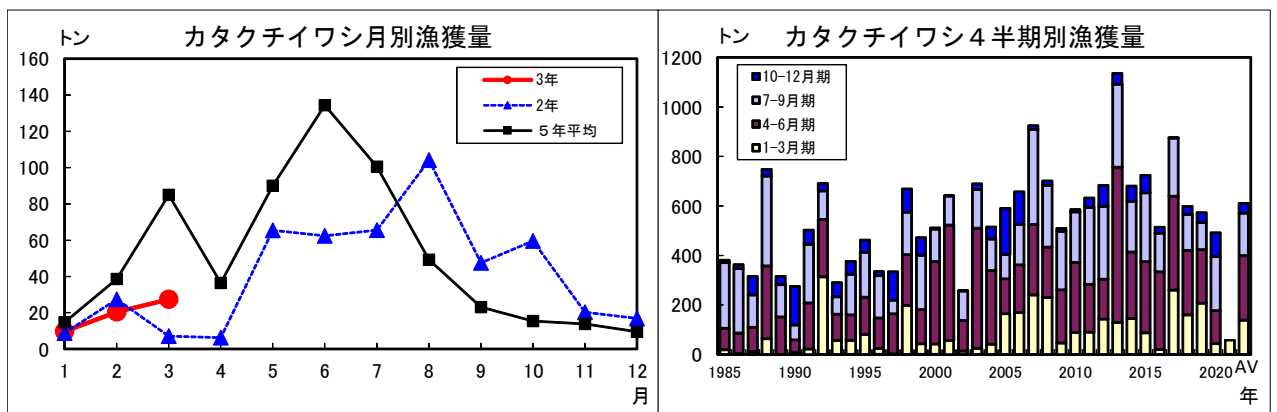


図 カタクチイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

※平年値は過去5年の平均値(AV), 令和3(2021)年3月23日までの水揚量を使用

[ムロアジ類 (参考：漁況経過のみ記載)]

〈クサヤモロ，モロ（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

県内の令和3（2021）年1～3月期の漁況の経過

ムロアジ類の漁獲量は，平成2年の21,700トン进行ピークに急減し，平成6年以降は，1,500トンから5,000トンの間で推移しており，令和2年は2,309トンとなりました。

4港計のまき網では，種子島南，島間沖，志布志沖でクサヤモロ中小主体の漁場が形成されました。期全体で520トンの水揚げで，前年の75%及び平年の80%でした。

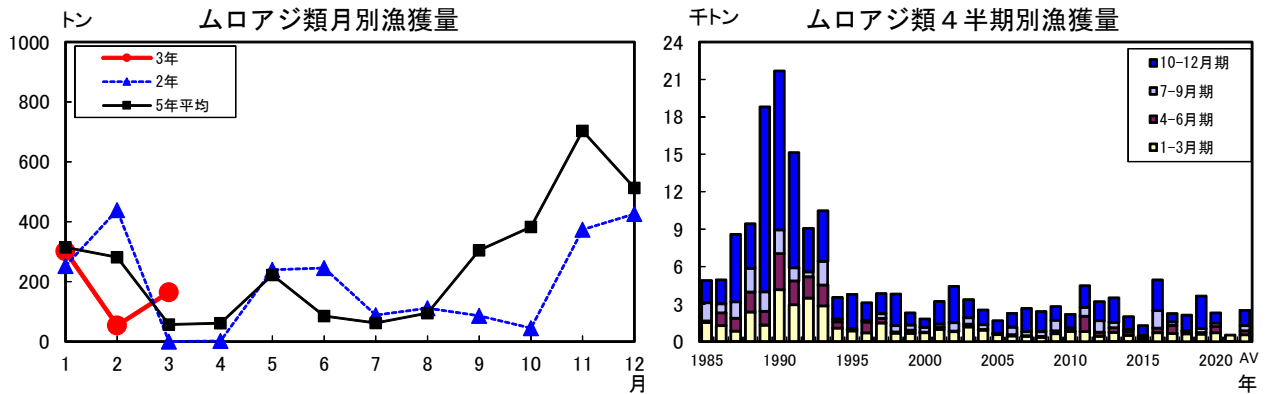


図 ムロアジ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)，令和3（2021）年3月24日までの水揚量を使用

〈オアカムロ（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

県内の令和3（2021）年1～3月期の漁況の経過

オアカムロの漁獲量は，平成元年の5,300トン进行ピークに一旦減少し，平成7年に4,400トンと再度ピークを迎えた後は減少傾向となっていました。平成20年に一旦増加したあと再び減少傾向を示しましたが，令和2年は1,214トンとなりました。

4港計のまき網では，主に志布志沖でオアカムロ豆主体の漁場が形成されました。期全体で23トンの水揚げで，前年の9%及び平年の4%でした。

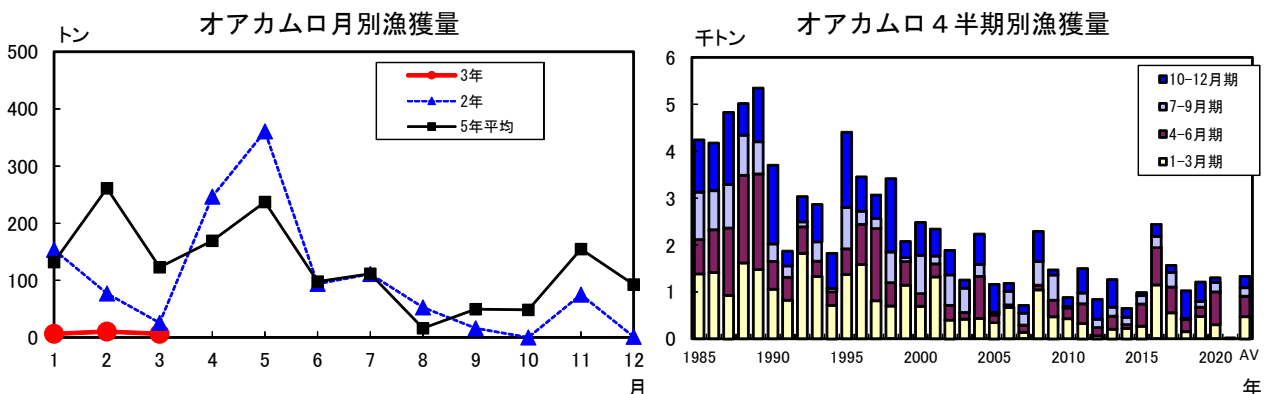


図 オアカムロまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)，令和3（2021）年3月24日までの水揚量を使用

〈マルアジ（アオアジ）（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

県内の令和3（2021）年1～3月期の漁況の経過

マルアジの漁獲量は、昭和62年から平成元年に1,500トンを超えるピークがあり、その後低調に推移し、平成12年から15年に再度ピークを迎え15年には3,150トンと最高を記録しましたが、平成16年以降は低調に推移し、令和2年は448トンとなりました。

4港計のまき網では、野間池沖でマルアジ中主体の漁場が形成されました。期全体で78トンの水揚げで、前年の38%及び平年の47%でした。

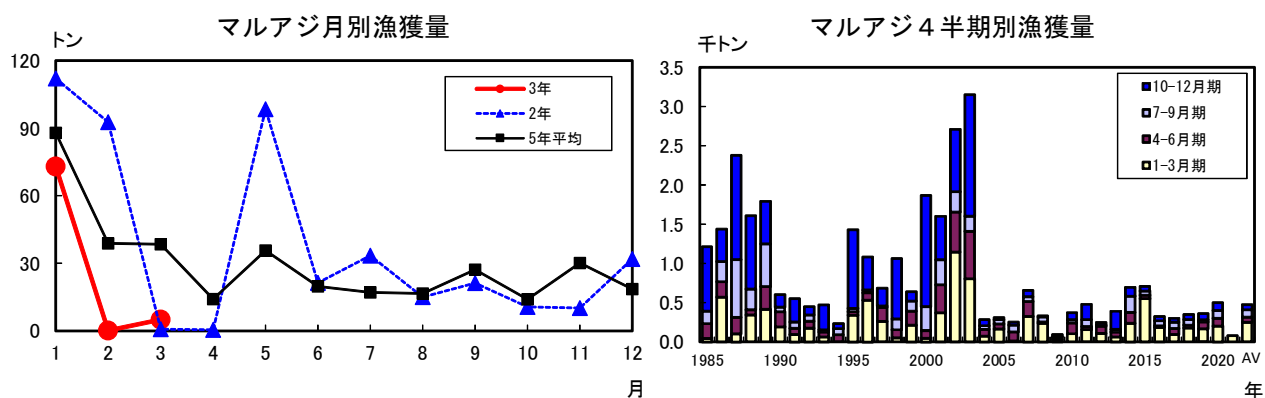


図 マルアジ（アオアジ）まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)，令和3（2021）年3月24日までの水揚げ量を使用